

女性の起業と経済的エンパワメントのプロセス

飯 島 絵 理*

本稿では、女性の起業前後の活動や経験をジェンダーにかかわる学びとエンパワメントのプロセスとして捉え、1人の女性の起業の事例について、社会的背景や規範・慣習といった環境要因に規定されながらも、資源を利用しつつ、どのように主体性や関係性を築いていくのか、またコミュニティに影響を与えていくのかを検討した。

検討の結果、①事例の女性が、起業にかかわる経験を通して経済的なエンパワメントを獲得するプロセスが明らかになった。また、②公的機関等の教育的なアプローチが、起業における社会性の志向を強くするだけでなく、いかなる社会性を志向するのかに大きく影響していること、③エンパワメントは1人で達成していくものではなく、行政や仲間等の関係性の中に捉える必要があること、またこのような社会関係資本が幾重にも重なる時に、個人がエンパワメントしていくとともに、多様な人々が暮らしやすいコミュニティも広がることが示唆された。

キーワード：女性の起業、エンパワメント、女性の学習、参加としての学習、教育的アプローチ

1. はじめに 課題設定

本稿では、女性の起業前後の活動や経験をジェンダーにかかわる学びとエンパワメントのプロセスとして捉え、1人の女性の起業の事例について、社会的背景や規範・慣習といった環境要因に規定されながらも、資源を利用しつつ、どのように主体性や関係性を築いていくのか、またコミュニティに影響を与えていくのかを検討する。事例として、宮古市で農家に嫁ぎ、東日本大震災後に男女共同参画センターの起業講座を受講して起業し、ハーブを栽培・加工・販売するとともに、ハーブを活用して障害者や被災者等、多様な人々が集まる場づくりを行う女性Aさんの起業を取り上げる。Aさんへのライフストーリーインタビューをもとに、そのライフコースをたどる。

ここで起業に焦点をあてるのは、労働の形態の1つとしての起業を通して、女性のエンパワメントの要素である経済的な側面を捉えるためである。あわせて、女性の起業の今日的な位置づけとして、起業という働き方の選択や、起業前後の意識や行動が、ジェンダーにかかわる学びに深くかわり得ると考えるためである。

*教育学研究科 博士課程後期

女性は一般に、就労において出産・育児・介護等のライフイベントの影響を受けやすく、就労継続やキャリア形成、経済的自立等に多くの課題を持つ。つまり、男性中心の雇用慣行が基盤となっている労働市場から排除、あるいは周辺化されてきた。これに対して起業という労働は、十分な収入を得られていない場合が多い等、様々な課題は孕むものの、従来の慣行に従うのとは異なる働き方の選択肢としての可能性を持つものと位置づけることができる。現在、起業は女性の経済的エンパワーメントの有効な手段として、国内外において注目されており、国内では地方創生や経済社会の活性化の手立てとしても、様々な機関が女性を対象とした起業支援を行っている。男女共同参画センターでも起業講座を開講している施設は多いが、これらの講座では、起業のためのノウハウよりも、女性の今までのキャリアを振り返り、今後の働き方、暮らし方について学びを得る機会となるようにプログラムが組み立てられているところに特徴があるといえる（飯島 2016）。本稿においては、この男女共同参画センター（女性センター）が主催する起業講座を受講して起業した事例を取り上げる。

起業を通じた女性のエンパワーメントを検討する上で、本稿は、特にインフォーマル・エデュケーションに着目する。上述のように、女性にとって起業は、ジェンダーにかかわる課題を乗り越えて新たな働き方、暮らし方、生き方を模索する試みであることから、そのプロセスは労働の場の創造であると同時に、生活の場の創造でもあると言える。この起業にかかわる日常の労働および生活の場における学習を対象とする。Aさんの経験には、男女共同参画センター等の機関が提供する学習機会への参加も含まれているが、これらも、知識や技能の習得の内容ではなく、参加をきっかけとした人間関係の蓄積等に主に注目することとする。

このような学習の捉え方は、学習を状況に埋め込まれた実践コミュニティへの参加として捉え、「人、行為、さらに世界を関係論的に見る」（レイブ、ウェンガー 1993:25）Lave と Wenger による状況的学習論（Situated Learning Theory）や、経験の再構成論や相互作用論を中核とした Dewey をルーツとし、経営教育の分野で Kolb が主張した経験学習の理論（Experiential Learning Theory）と同じ立場を志向するものである（デューイ 2004；田中 2004；山川 2004）。学習論は、この約 30 年間で「獲得としての学習」から「参加としての学習」へのパラダイム転換が生じており（高橋 2015）、近年では、国内でも、特に企業経営等の分野において、職場での人材育成をめぐる議論がなされている（松尾 2006；中原 2010, 2012, 2013）。

社会教育の分野における 1970 年代以降の「女性問題学習」を中心とした女性の学習研究（村田 2006）は、学習を講座を通じた机上のものとして捉えており、また、労働の課題については十分に取上げていない（高橋 2005；朴木 2010）。また、女性の起業をテーマとした研究は、農業分野に多く散見され、主として、高齢化・過疎化の課題解決の糸口となっている女性たちの 6 次産業化の事例を提示するもの（松永 2010；関満・松永 2012, 2010；澤野 2012）や農村女性の歴史的・社会的問題をジェンダーの視点から社会学あるいは村落研究等の見地から分析するもの（日本村落研究学会 1995, 2012；秋津ほか 2007；藤井 2011；徳野・柏尾 2014）に分けられ、農産物を活用した直売所や飲食店の経営事例等が多く紹介、分析されている。しかしながら、上述のようにこれらを経験としての学習

の観点から捉えた社会教育の研究は見当たらない。

また本稿では、女性の起業を通して地域づくりを志向する取組に着目することで、個人の労働や生活の場への参加とあわせ、それらによるコミュニティへの影響についても検討する。現在、男女共同参画にかかわる施策の流れとしてだけでなく、持続可能な社会を築いていくためにも、包括的な地域づくりが必要とされている。ジェンダーの視点を学んだ女性たちの起業は、女性やマイノリティ等、多様な人々の暮らしやすさを重視したコミュニティづくりに大きく貢献する可能性がある。

以上のような視点に立ち、本稿ではAさんの起業前後の学習とエンパワーメントのプロセスを検討し、①起業前後の経験における学びの転機に、環境要因がどのように影響しつつ、Aさんが主体性や関係性を築いていったのか、また②個人的なアウトカムだけでなく、地域づくりに向けた社会的なアウトカムをどのようにして志向するに至ったのか、さらに、①および②において、③行政や男女共同参画センター等の公共機関はどのような働きかけを行ったのかについて考察する。

2. 女性の経済的エンパワーメントと環境要因

次に、女性の経済的エンパワーメントの要素やそれに影響する環境要因について、本稿においてどのように捉えるかを検討する。

女性の経済的エンパワーメントの定義や要素、支援の際の手法や評価のあり方については、国際機関等による途上国支援において様々に検討されている(飯島 2016)。これらの議論に共通しているのは、女性の経済的エンパワーメントの要素の1つとして、エージェンシー (agency) が含まれること、また、単に経済的な成功やスキルの向上といった直接的、表面的な要素だけでなく、エージェンシーや意思決定、規範、役割等を含め、多面的に現状を捉える必要があるということである。

エージェンシーは、女性のエンパワーメントやジェンダー平等の基礎となるものである(The International Bank for Reconstruction and Development/The World Bank 2011)。つまり、経済的エンパワーメントは、経済的側面のみを切り取ったエンパワーメントを意味するのではなく、包括的な「女性のエンパワーメント」と結びつきの強い、あるいはこれが基礎にある上でのものであるといえる。また、エンパワーメントが「個人の行動や選択だけでなく、より自由な選択が可能になるような変化のプロセスを含む」(Sida 2015:8)ように、経済的エンパワーメントも、結果と同様にその過程が大切であろう。

本稿では、このような議論の1つとして提示される Anne Marie Golla らの女性の経済的エンパワーメントの枠組(Golla et al. 2011)を整理の際の参考として用い、今回の分析に合うよう修正する。Gollaらの整理では、女性の経済的エンパワーメントの相関する2つの要素として、「パワーとエージェンシー (Power and Agency)」と「経済性の向上 (Economic Advancement)」を提示している。また、それらに影響を与える環境要因として、「資源 (Resources)」と「規範、制度 (Norms and Institution)」の2つを挙げている。この文脈において、Giddens (1984)の概念でいうエージェンシー＝行為主体性(倉田 2011)は、「意思決定」として定義づけられている¹。意思決定、あるいは意思決定過程への参画は、ジェンダー平等に向けた重要な課題である。また、「参加としての学習」の観

点からは、「関係性」を築くことは重要であろう。したがって、ここでは、女性の経済的エンパワーメントの要素を「主体性」「意思決定・参画」「経済性」「関係性」として捉えていきたい。

本稿ではエンパワーメントのプロセスを、個人のライフストーリーをもとに、「個人がたどる、生涯にわたる各種役割経歴の束としての軌跡」(岩上2013:36)としてのライフコースに沿って検討するため、エンパワーメントに影響を与える環境要因を考える際には、このプロセスを見る理論も参考にする必要があろう。ライフコース理論では、個人の行動システムを形成する4つの重要な要素として「時空間上の位置(文化的背景)」「結び合わされる人生(社会関係)」「人間行為力(個人の目標志向性)」「人生のタイミング(戦略的適応)」を挙げている(エルダー・ジール編2003)。女性の経済的エンパワーメントにかかわる要素として捉えるべきエージェンシーや資本といった観点との重なりに加え、社会的・歴史的な位置づけや個人的な戦略・成果という要素がライフコースに影響することを示しているといえる。また、臨床心理の分野におけるシュロスバーグのトランジション(転機)理論では、個人の転機を乗り越える能力に影響を及ぼす要素として、「状況(Situation)」「自己(Self)」「周囲の援助(Support)」「戦略(Strategies)」を挙げている(青島2009, 黒川2007)。これらも内面的および外的な環境要因およびそれらへの対処を示しており、女性の経済的エンパワーメントの枠組やライフコース理論と重なる概念といえる。このような議論を踏まえ、ここでは、環境要因を「社会的背景」「個人的背景」「制度・規範」「資源(人的・物理的・経済的・社会関係)」として捉える(図1参照)。

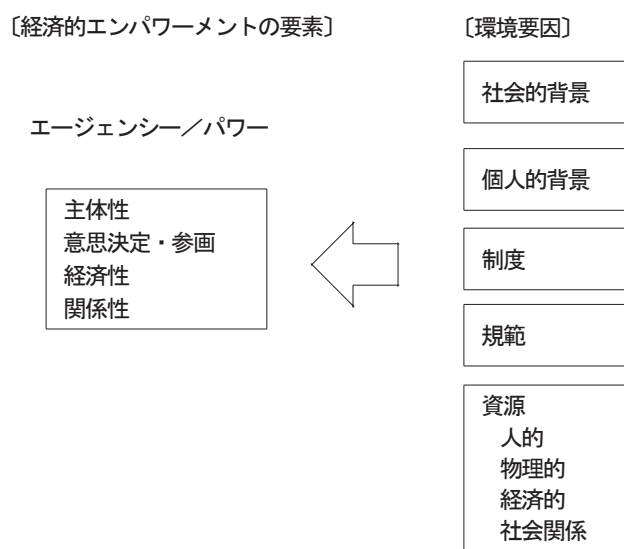


図1 女性の経済的エンパワーメントの要素と環境要因

ライフコースアプローチは一般に、個人の行動や内的または外的変容に焦点が当てられ、それらがコミュニティにどのような効果をもたらしているかについては関心が注がれない(エルダー・ジール編2003, 2013)。一方、活動の状況や地域に現れた変化等に焦点が当てられるものには、近年

の教育実践における社会的インパクト評価に関する研究があるが、これらは個人の学びによる内面的変化やそれが地域に与える影響等については分析していない(三菱総合研究所2008, 2009, 2010, 2011; 野村総合研究所2009)。本稿でのもう1つの試みとして、この2つの領域を連続性のあるものとして考察する。つまり、女性が担う様々な役割やそれらに対する意識や期待、人とのつながりといった事柄が主体性の獲得にどのように影響しているかをライフコースに沿って考察し、合わせて、個人の学びや行動が、地域への効果にどのように関連しているかを見ていく。これらの連続性を見ることが、行政や男女共同参画センター等の公共機関が、個人のニーズに沿いながら、集团的に効果のある支援を行うために必要な働きかけについて検討することもできると考える。

3. 宮古市在住Aさんの事例²

3-1 Aさんの事例の概要(プロフィール)³

Aさん(1958年生)は、宮古市の自宅の農地でハーブを栽培するハーブ園を営んでいる。収穫した無農薬ハーブを地下水で洗って天日干しし、ハーブティーに加工した商品を販売する。代々続く農家に嫁ぎ、とうもろこしを栽培する義母を手伝いながら訪問ヘルパーの仕事をし、3人の子どもを育ててきた。Aさんが起業した大きなきっかけは、東日本大震災で夫を亡くし、何代も守られてきた土地を守りたいと思ったことである。それまでも、畑の一部でハーブを作って商品化し、小規模の販売はしていたが、もりおか女性センター⁴が主催する起業講座の受講が後押しとなり、県の助成も受けて本格的に栽培を始めた。起業1年目には、販路のこと等で不安になり気分が落ち込んだが、家族や起業仲間、女性センター職員の支えもあって回復し、その後は人とのつながりや県等の支援等を活かしつつ、起業4年目の現在、販路は徐々に開拓されている。ハーブ園では、せっけんやアロマキャンドル等、ハーブを使った作品づくりを通じた交流の場も提供しており、Aさんの長年の訪問ヘルパーとしての経験も活かし、障がい者と小学生の交流会の開催等、地域の人と人をつなぐ活動も広げている。

3-2 起業前後の経験のなかでの学びとエンパワーメントのプロセス

職場結婚で代々続く農家に嫁ぐ〔短大卒業～就職～結婚〕

Aさんは、短期大学の家政科を卒業後、岩手県の出先機関である広域振興局に臨時職員として勤務した。27歳(1985年)の時、同じ職場で働く男性と恋愛結婚し、宮古市で代々続く農家に嫁いだ。結婚当時、義父は市議員や農協の組合長を務めていた。Aさんが結婚して5年後に、60歳で義父が亡くなった際には、市民会館で大きな葬儀をするくらい、市の農業振興に貢献している人だった。そのためAさんは、嫁いで来る際には、代々守られてきた農地を、自分も守っていく決心をしたという。

大学で魚の養殖の技術を学んだ夫は、市の産業として昔から盛んであったサケの「栽培漁業」に携わり、結婚後は漁協に勤めた。Aさんの実家は、同じ宮古市で水産加工業を営んでおり、家や地域に根強く残る伝統的、封建的な風習は、結婚後に初めて経験するものだった。嫁いだ次の日から、

家事の一切はAさんの役割となった。当初は「どこになにがあるかもわかんないまま私、バトンされて、味もなににもわかんない。…何かいっつも緊張してびやびやししながら食事もつくってっていう感じだった」といった苦労があった。29歳(1987年)、31歳(1989年)、33歳(1991年)の時に生まれた3人(長女・長男・次女)の子育ては、義母の畑仕事を手伝いながら、ほとんどAさん一人で担っていた。

【転機①】農業改良普及センターでの学びとグループ活動の開始〔子育て期〕

当初、農地ではとうもろこしと米を作っており、義母は茹でたとうもろこしを訪問販売していた。3人の子どもが小さい頃は、「本当に家から出たこともないし、車の免許もなかったので、家で子育てをして、他の人と会うこともなかった」が、一番下の子どもが幼稚園に入った頃、県の農業改良普及センターの職員から誘いを受け、「生活講座」(農業改良普及センター、岩手宮古農協主催)に参加した。この講座には、Aさんと同じように、農家出身ではなく農家に嫁いだ子育て中の30歳代、40歳代の女性が近隣の市町村から集まっており、ここで、一人だけで抱えていた農家の嫁としての悩みを語り合うことのできる仲間をつくることができた。講座の修了生15名で、1995年に「キャロットの会」というグループを結成し、Aさんは2代目の会長になった。この頃は、農家における「家族経営協定」の締結に必要性が言われ始め、各地で取組が進み始めた頃にあたり、農家の女性の生活や労働の現状等について、会の仲間といろいろと勉強をするようになった。また、活動の一環として、JA花巻の直売所に展示されたハーブや盛岡市内のハーブ園を見学し、これをきっかけに、ハーブに関心を持つようになった。

義母は収穫期になると朝の4時半に起きてとうもろこしを茹で、それをバイクの後ろに積んで市場や個人宅を回り売り歩く。ハーブに出会ったのは、将来、自分の代になってもとうもろこしの栽培、販売を主として継続していくのは無理だと考え、何か他のものを栽培したいと考えていた頃だった。そのため、ハーブのことをしっかり学びたいと考え、県の農政部が主催するハーブ講座を受講し、ハーブの歴史や調理方法、石けんや染物、リースづくり等を習得した。農政部の講座担当者に、ハーブ栽培に関心があり、もっとハーブのことを学びたいと話したところ、県内の他地域の女性グループのための研修にも加えてもらえ、先進的にドライフラワー作りを行っている軽井沢の農家にも視察に行き、知識を深めることができた。

農地の一部を使用してハーブを栽培、小規模の販売や体験の場の提供を始める〔子育て期、ハーブ栽培開始〕

学んだことを実際にやってみながらハーブづくりをさらに勉強したいと思い、義母に相談すると、農地の一部を少し(5アール)使っていいと言ってくれた。最初は夫に反対されたため、「私は家の奴隷じゃない」と言ったのを覚えている。家の中では、義母に言われたことに従い、言われたことだけやっていたらいいというような暗黙のルールがあった。「そこで言わなかったら、ハーブも植えられなかったし、今がないんですけど」とAさんが振り返っているように、ハーブ栽培をやりたいこ

とを夫と義母に説明し、理解してもらうことができたことが、実際にハーブ栽培にかかわる大きな一歩となった。

自分で作ったハーブティーは、最初は子どもの通う幼稚園や小学校、中学校、高校の先生や知人にあげていた。「みんなハーブを知らないし、私は名刺代わりじゃないけどお世話になった先生にあげて飲んでみてくださいっていったら、わあって、先生たちもストレスが多いので気に入ってくれて」と話すように、知人に配り、喜んでもらえることで、Aさん自身も満足していた。小中学校では、ハーブ石けんやドライフラワーのリースづくりの体験学習の指導をする等の活動も行った。

ある時、このハーブティーを地元のタクシー会社社長であるBさん(女性)が飲んで絶賛してくれた。Bさんからは、「いつかハーブで宮古を元気にできればいいわね」と言われたが、Aさんは、「その時は何言ってるのかなってね(笑)笑ったんですけど」と言うように、その時は現在の起業のような状況は、全く想像してはいなかった。Bさんは社長業とあわせて、市の活性化のために中心となって活動しており、「このまま趣味だけじゃもったいないから」と商品化を進めてくれた。そこで2003年に、県の農政部の補助を受けてパッケージをつくり、Bさんの提案で「潮風のハーブティー」と名づけ、商品化した。2004年からは市の助成を受け、Bさんが活動の中心となり、震災前まで走っていた三陸地方を循環するJR「ぐるっとさんりくトレイン」で、宮古駅を降りる観光客へのウェルカムドリンクとしてハーブティーが配られるようになった。この他、市内の道の駅での販売も始めたが、優先度としては、後述する収入源としての訪問ヘルパーの仕事が第一であり、ハーブティーの売り上げを伸ばそうとは思っていなかった。

3人の子育てや畑仕事をしながら訪問ヘルパーとして働く〔子育て期、就労〕

この頃、家を新築し、家のローンや3人の子どもの大学進学にかかる費用を考えると、農業の収入は少なく、現金収入が必要になったため、外で働くことを決めた。「パソコンもできないし、事務もできないし、じゃあ何で稼ごうっていうことになった時に、主人が、お前ができるのは、ご飯の支度とかお掃除とか、家のことだから」ということで、当時、市が実施していたヘルパーになるための講習を受講することにしたと言う。この講習に通ってヘルパーの資格を取り、第3子の次女が中学生になった頃から、社会福祉協議会に所属して、障がい者を主とした訪問ヘルパーとして働き始めた。さらに3年の実績を経て、介護福祉士の国家資格も取得した。Aさんは、義母の畑仕事も手伝い、車の免許の取得後はとうもろこしも一緒に売り、3人の子どもの子育て、家事をしながら働いた。「とうもろこしの時は4時半に起きて、炊いて。それで子ども達にお弁当を作ったりして。そして今度はヘルパーの仕事をしてっていう。そういうので、もう本当に寝る暇がないくらいっていうのが10年ぐらい続いた感じ」だった。社会福祉協議会に所属する訪問ヘルパーという働き方であれば、畑の収穫の繁忙期には、午後にヘルパーの仕事を入れるなどの融通がきくため、とうもろこしの収穫・販売と両方を続けることができた。訪問ヘルパーの仕事は、2015年に正式に辞めるまで、起業後も続けた。

【転機②】 起業講座を受講、本格的にハーブを栽培〔東日本大震災、夫の死、起業〕

2011年3月の東日本大震災は、Aさんの生活を大きく変えた。沿岸から4km離れた自宅と義母は無事だったが、漁協に勤める夫は、地震の後に停電したサケの稚魚のふ化場を見に行き津波に合い亡くなった。Aさんと子ども3人は、長男の大学の卒業式に出席するために都内に行っている時だった。

震災後すぐに、何社もの建設会社が、宅地にするため農地を売ってほしい、あるいは貸してほしいと言ってきた。実際に、付近では田畑を売った農家も多かった。しかしAさんは、何代も守られてきた農地を手放したくないと思った。義母も農地を売らないとがんばっていたが、震災の翌年にひざを痛み、変わりなく農作業をすることが難しくなった際に弱気になり、どこかに売ってもいいのではと初めて口にした。加えて、この年はとうもろこしがアナグマの大きな被害にあった。

今後のことを迷い、2013年に、農業改良普及センターの旧知の普及指導員に相談したところ、一般社団法人さんりく未来推進センター⁵の職員を紹介してくれた。そして、その職員から、もりおか女性センターが復興支援として同年10月に宮古で開催する女性起業講座のちらしがファクスで送られてきたのを見て、すぐに受講を決め、参加した。

講座を受講するまでは、起業することも具体的には考えておらず、「悩んでいたのでもっと、畑を無駄にしないで、売ったりもしないで守りたいけど、どうやっていいかわかんない」という状況だった。講座は2日間の連続講座で、ロールモデルによる事例の提供やグループワーク（気持ちの整理、経験の棚卸等）、ノウハウの提供等から構成されていた。Aさんは、参加者や講師、もりおか女性センターの職員、講座を助成した（特活）オックスファムジャパンのスタッフらにハーブティーを飲んでもらい、敷地の航空写真を持参して状況を説明した。ハーブティーは好評で、都会での販売に向けてパッケージを変えたり、生産量を増やしたりするアドバイスを受けた。また講師から、訪問ヘルパーの仕事をしていることが、ハーブでの起業後の活動を広げる可能性があることを指摘してもらった。

これらの助言に勇気づけられ、受講した翌年1月には開業届を申請し、「潮風のハーブティー」を商標登録した。県の助成金（平成25年度さんりく未来産業起業促進事業）でビニールハウスや乾燥台を購入し、農地のほとんどを使ってハーブ栽培を始めた。畑仕事やハーブの洗浄、乾燥、袋詰め等の商品化の作業は、Aさんがほぼ1人で行うが、繁忙期には友人や同居する娘2人（保育士、看護師）が手伝っている。

【転機③】 起業後初めての冬の気持ちの落ち込みと回復〔起業後の挫折期と起業の継続〕

Aさんが起業して初めての冬、販路の心配や、起業は失敗だったという思い込みなど、不安や後悔の気持ちが強くなり、精神的に大きく落ち込んだ。夫が亡くなってからも弱音をはかずがんばってきたことに加え、周りにはAさんが起業したことに対して批判的な態度をとる人もいたことも影響した。家には農協の組合長だった義父も、退職後は自治会長をしていたはずだった夫もいない。その上、Aさんが、農地に新たにハーブに植えて起業し、当初はテレビ局が来たり、新聞に取り

上げられたりしたことで余計に目立ち、男手がなくなって好き勝手なことをしていると捉えられた。新しいことすることにも寛容な風土ではなく、中傷に苦しんだ。

そこから回復していったのは、子どもたちと義母が支え、応援してくれたことが大きかった。息子は、「そういうので苦しんで自分が病むのはばかみたいだから、応援してくれる人たちに感謝して、おかあさんがやってきたことを続けたほうがいい」と言ってくれた。もりおか女性センターの職員や、さんりく未来推進センターの起業支援の基礎講座で知り合った仲間も気にかけて訪れてくれた。病院で薬を処方してもらうと眠れるようになり、冷静に物事を考えることができてきた。春がきて土にふれ、気分も良くなっていった。

人のつながりや県の支援による販路の広がり〔起業の成長期〕

2017年2月現在、起業から3年が経ち、販路も広がってきた。公募の情報や出品等の機会があると、県の職員から声がかかるようになった。起業翌年の2015年度には、岩手県農林水産部流通課が主催する「ふるさと食品コンクール」で優良賞を受賞した。ふるさと納税の返礼品にも選定された。同年、東京都の虎ノ門ヒルズで岩手県産の食材を使ったイベントがあった際には、Aさんのハーブティーがウェルカムドリンクとして使用された。この時に対面した盛岡市にある大きなホテルのシェフが、しばらくしてからハーブ園を訪れ、レストランやカフェ、結婚式場（利用相談者用）で使用するための注文が入るようになった。他にも、盛岡市の百貨店等、数店舗で商品が取り扱われるようになっている。もりおか女性センターの起業フェスタに出展した際に試飲したという洋品店を起業した女性が、お店に置きたいと購入するといったつながりもある。

2016年の春からは、県の商工労働観光部が行う「三陸復興商品力向上プロジェクト」の支援を受けて、約半年かけてギフト用パッケージを開発した。今後は、県等が出資する県産品を取り扱う企業に商品を卸し、この企業が東京や盛岡の取引先を開拓するルートも得ることができた。1年目に本格的にハーブ栽培を始め、2年目、3年目は収穫や加工、後述するハーブを活かした活動等で毎日が忙しく、1年目の冬期のような気持ちの落ち込みもなくすごすことができた。パッケージの開発や試飲会等の活動を行いながら、着実に販路を広げている。

ハーブを活用した場づくり〔起業による地域への効果〕

販路を広げる一方で、ハーブを活用した「癒やしの場」づくりにも力を注ぎたいと考えている。リラクセス効果やストレスを和らげたりする効果のあるハーブティーを飲んだり、あるいは、石けんやアロマキャンドルをつくったり、ハーブは、集まった人が語り合ったり、ゆったりとした時間をすごしたりする空間を創るのに活かすことができる。2015年の秋には、自宅の敷地内に、さんりく未来推進センターを通じた起業仲間である若い大工に、立ち寄ってお茶を飲むこともできるような作業場を建ててもらった。他地域の農協の女性部、障がい者、小学生等が訪れ、この場づくりの活動も徐々に広がってきている。

新聞記事でAさんの活動を知り、釜石からハーブ園を訪れた被災者の女性もいる。Aさんは、夫

を亡くした自分の立場や「場」について以下のように話す。

やっぱりハーブの力、癒しをみんなが求めてるっていうのに合ってるんだらうなっていう。今のこの震災後の人達が、6年経っても、みんなが病んでるんですよね、実際。だからここに来る人もいるし。私も主人を亡くしてるっていうことが、他人とはやっぱり、人は大変だねって言ったって、やっぱり人ごとなんですよ、実際。声では言うけど。でもやっぱり家をなくしたり、人を亡くした人じゃないとわかんないっていうのは、みんながあつて。…やっぱり苦しみは人の倍はしてきたんじゃないかなと思うし。そうすると他の人の苦しみもわかってあげられるしっていう感じかなって。

また、県の「平成27年度高次脳機能障がい者地域支援体制整備事業」を受託している市内のNPO法人と連携した特別支援学校の子どもの受け入れや、市の企画による小学生と知的障がい者の交流会の開催等も行っている。Aさんは、障がい者のヘルパーであったため、重度の障がいを持った人が訪れても、対応のしかたがわかっている。障がい者が農業の担い手となる「農福連携」への社会的関心も高まってきていることから、今後はこのNPO法人と連携して、引き続き障がいのある子どもを受け入れるとともに、ハーブの収穫や加工に障がい者を雇用することも考えている。

この他にも、もりおか女性センターの起業講座の関係者や介護ヘルパーをしている時に所属していた社会福祉協議会の関係者等、様々な人から声がかかるなどしてつながりながら、市内のシングルマザーの会に出向いてハーブティーを飲んでもらったり、大槌町のショッピングセンターでキャンドルづくりをしたり仮設住宅を訪問したりする活動も行っている。

4. 起業にかかわるエンパワーメントのプロセス

4-1 起業にかかわる学びの転機とエンパワーメント

以上のようなAさんの起業前から起業後までの学びとエンパワーメントのプロセスを検討していく上で、そのプロセスに特に影響を与えるきっかけとなった節目を転機とし、前節のライフストーリーの小見出しの前に、**転機①** **転機②** **転機③** とつけた3つの時期に分けた。1つ目は、農業改良普及センターでのグループの結成とここでの学びである。農家に嫁いだ子育て中の女性たちと悩みを共有するとともに、ハーブと出会い、栽培や加工の技術や歴史等を学ぶ。これを、何かとうもろこし以外の作物を作りたいと考えていた答えに結びつける。そして、農地の一部でハーブを栽培できるように義母を説得し、小さな規模での商品化に至っている。

2つ目は、東日本大震災で夫を亡くし、生活が一転した時期である。農地売却の危機のなか、代々受け継いできた農地を守りたいという強い意志は、何とかしなければと思うAさんを行動に駆り立てた。普及指導員への相談が、もりおか女性センターの起業講座開催の情報につながり、講座の受講により起業を大きく後押しされる。土地を守り続けていく意思が力となって、ハーブ栽培を本格的に始めることを決める。

3つ目は、起業後の初めての冬の時期の大きな気持ちの落ち込みからの立ち直りであり、立ち直り後には販路や人のつながりも広がっており、この際に、起業継続に向けて1つの壁を乗り越えたといえそうである。

以下では、これらの3つの転機に沿って、エンパワーメントの要素やこれらに影響を与えている環境要因を少し詳しく見ていく。

Aさんは、農家に嫁ぎ家父長的な規範のなかで子育てと家事に専念していたが、末子が幼稚園に入園し、日中に子どもが家にいない時間ができた[転機①]の時期に、家から外に出て自分と同じ子育て世代の非農家出身の女性とつながることができた。仲間との学習で得たものは、ハーブの知識だけではなかったはずである。グループを結成した年の1995年には第4回世界女性会議が北京で開催され、国内でも、行政やNGO等の女性団体において、男女共同参画推進に向けた機運が高まってきた時期である。Aさんが言うように、この頃は、農業の分野では家族経営協定の締結が進められていた。子育てに1つの区切りがついて外の社会とつながり、自分と社会の関係性に気づき、共通した立場にある仲間を得たことは、主体性の獲得や社会参画の第一歩といってよいだろう。義母と夫に農地を少し使ってハーブの栽培をしたいと話した際の「私は家の奴隷じゃない」ということばは象徴的である。

転機①では、県の農業改良普及センターの普及指導員や農政部の職員が、この時期の農村女性の政策として、個々の非農家出身の子育て中の農家の嫁に声をかけ、講座受講をきっかけとして集まる機会をつくり、グループの結成・活動につなげる大きな役割を果たしている。Aさんのハーブのことをさらに学びたいという希望に対しても、他地域の研修への参加等、柔軟に対応して、段階的な技術習得の機会を提供している。

[転機②]においては、東日本大震災での夫の死を背景として、家庭の中でのAさんの主体的な意思決定がなされている。家庭内のジェンダーにかかわる規範が崩れた状況のなか、嫁いで以来抱いてきた農地を守っていくという思いに対して、売却の危機や義母の身体の不調、トウモロコシの獣害が重なり、普及指導員への相談につながった。

受講した起業講座では、起業としての知識だけでなく、参加者や講師との交流が資源となっている。

だから、そこに行ったのが起業の始まりだったかなと思うんです。そこで皆さんがハーブティーを飲んで、おいしいと言ってきて。都会に出したほうがいいって言ってもらって。そこで後押しをしてもらったというか。…自分も必死だったと思う。今思うと、自分もどうしてやっていこうかって思って、悩んでいたところだったので。自分もそこにいて、こうやって作ってるんですけど、自分もその時は必死で、たぶん言ってたと思うんですけど。ただ、皆さんがハーブティーを好きだった方が、女性の若い方がいっぱいだったので。皆がおいしいから、ぜひって。じゃあ都会に向けてパッケージを変えたほうがいいし、生産量を増やしてとかっていうお話をもらったり、あとは障害者、私がヘルパーをしているということと、ハーブをやるということが、障害者とか、いろんな可能性が生まれますねと言ってもらって。

皆でいろいろと話し合いながら、Aさんの強い思いを事業化に向けて整理していく過程で背中を押されたことがうかがえる。また、講師が、Aさんのこれまでのキャリアとこれからの起業の内容の関連性について、また、ハーブを活かした起業を障害者とをつなげて活動を地域で広げていく方向性について示唆している。

背中を押されたAさんは、ハーブの栽培・加工・販売によって農地を守っていくために、その後すぐに起業届を申請し、助成金を活用して道具をそろえ、農地のほとんどでハーブ栽培を始めた。

【**転機③**】において、Aさんの気持ちの落ち込みには、先述のように複合的な背景が関係しているが、その1つとして、ジェンダーにかかわる風土や期待等の規範が、マイナスの環境要因としてあったと考えられる。つまり、家庭内での夫の不在が、**転機②**においては、Aさんが起業に向けて動いていく要因となったが、**転機③**では、地域のリーダー候補でもあった家父長の不在のなか、新たなことに挑戦することに対する周囲の否定的な態度としてAさんに影響を与えた。

この時にAさんを支えたのは、義母や子ども、仲間とのつながりといった人間関係であった。

やっぱり、まあどん底まで落ちないば、ダメだったなって。今思えば、その時は本当に辛くて、なんでこんなことって思うし、失敗、起業しなきゃ良かったって、そればかり思ってたんですけど。そこがさっきも言ったけど、家族がそうやって守ってくれたおかげで、そこをどうにか、その一冬をどうにか過ごせて。春が来て。そこからは本当にいろんなつながりが急にできてきて。だから今思えば、…それもあったから、今こうやってがんばれる。

やっぱり眠れないと、同じことをずっと考えて、グルグル責めてたんですけど。眠れるようになって、少し考える力がでてきた。そしたら、さんりく未来の仲間が、みんな心配してたんだっていうのがわかって。こっちに出てきて、お茶を飲もうとか声をかけてもらって。みんなが心配してたんだって言うてくれて。それで、ああ一人じゃないんだって。それまで一人で全部起業してから、栽培とかって一人だけでずっとしてたので。仲間がいるんだっていうのがわかって。

気持ちが落ち込んで立ち止まった際に、自分の挑戦を応援する人とのつながりを意識することができたことが、回復の大きな力になったことがうかがえる。

以上のように、起業前後を通して、Aさんが、農家の嫁としての自分と家族や社会との関係性を理解するとともに主体的に行動し、また農地を守るために人や支援にアクセスし、人とのつながりのなかで危機を乗り越え、事業を広げていったことがわかる。個人的・社会的な状況やジェンダー規範等、様々な要因に規定されながらも、その時々資源を利用し、働くこと、生きることを主体的に切り拓いている様子がうかがえるといえる。

4-2 起業前後の学びとエンパワーメント、および個人／地域への効果のプロセス

前項までに示したAさんの起業にかかわるエンパワーメントのプロセスを、3つの転機に沿って

整理し、簡素化して示すと表1のようになる。縦軸には、先に図1に示した環境要因に加え、公的機関による「働きかけ・支援」、「個人への効果(アウトカム)」、「地域への効果(アウトカム)」を設定した。

第1節、第2節で述べたように、本稿では、1人の女性の起業を通じた学びとエンパワーメントのプロセスを見ること、また、個人のエンパワーメントとコミュニティへの影響を連続性のあるものとして捉えることを試みている。表1を見ると、統計的あるいは複数名まとめた把握や、一時点の状況ではなく、1人のライフコースを辿ってプロセスを見ることで、個人の主体性や関係性等の時点による変化や、同じ環境要因の時点により異なる影響等の把握が可能になっていることがわかる。

転機のプロセスをおって見ると、Aさんの主体性の獲得や意思決定・参画には、個人や家族、事業や地域、社会等、異なるレベルや段階があることがわかる。また、ハーブを利用した地域づくりや販路の拡大に関しては、起業前にはやや受動的、消極的であったが、起業後には能動的な姿勢・態度に変化している。

表1 Aさんの起業前後の学びとエンパワーメント、および個人／地域への効果のプロセス

学びの転機 環境要因・効果	→	①農業改良普及センターでの学び →	②女性センターの起業講座への参加 →	③気持ちの落ち込み → と立ち直り
社会的背景		農村における男女共同参画推進	東日本大震災復興支援 女性対象の復興支援	復興支援 女性対象の復興支援
個人的背景	農家の嫁 家事・育児専念	農家の嫁 子育て期(末子幼稚園入園) 訪問ヘルパー(末子中学生～)	夫の死 農地売却の誘い トウモロコシのダメージ	精神的な不安→回復
規範・制度	農家の嫁としての立場・役割	農地を少し使いたいと義母に相談(自己主張)	夫に代わり家・農地を守る	伝統的な地域の慣習・意識(夫不在での新たな行動への批判的態度)
資源(人的・物理的・経済的)		「キャロットの会」結成・活動 農地でのハーブ栽培(5アール) ハーブ栽培・加工の技術	農地でのハーブ栽培・加工(50アール) ビニールハウス・乾燥台(助成)	家族や起業仲間等の支え 販路拡大に向けたつながり
働きかけ・支援(社会関係資本)		農業改良普及センター(参加誘い、講座) 県農政課(研修、補助金) Bさん(商品化勧める)	農業改良普及センター(つなぐ) さんりく未来推進センター(つなぐ、講座) もりおか女性センター(講座) 県(助成金)	起業仲間(見守る) もりおか女性センター(見守る) 県(情報提供、賞授与、商品の活用・販路拡大支援、商品開発支援)
↓				
個人への効果(アウトカム)		ハーブ栽培・加工技術の取得 「潮風のハーブティー」商品化 道の駅での商品販売	起業ノウハウの獲得 起業 起業にかかわる人・機関のつながり ハーブの商品化・販売 社会性の志向	農地の有効活用 ハーブ販売による収入 様々な人・機関とのつながり 子ども世代への土地の引き継ぎ(将来) インクルーシブな社会性の志向
地域への効果(アウトカム)		身近な人へのハーブ提供 小中学校での体験学習の提供 宮古駅で観光客にハーブティーを提供		障がい者、被災女性、シングルマザー等の交流の場づくり 市の特産物としての販売・地域の活性化 障がい者の雇用(将来)

起業後のハーブを利用した人や機関とのつながりも段々と広がり、Bさんや女性センターの講師等、個人の活動と地域づくりをつなげる視点を持つ人からの誘いや示唆が、Aさんの社会性を志向する活動を支えているといえる。また、Aさんの介護ヘルパーの仕事の経験、被災の経験、女性センターの講座を受けたことでできた人とのつながり等、複数の経験が重なり、結果として様々な人が集まることができるハーブを活かした場づくりを行うようになっていく。このように見ると、Aさんが起業に向けてパワーとエージェンシーを獲得し、起業において社会性を志向するに至ったプロセスには、仲間や行政職員、女性センター職員等のつながりや働きかけがあり、Aさんもまた、人や機関との関係性を築き、他者に共感し、つながりをうまく活かしていく力があつた（あるいは培ってきた）ことが大きく影響していることがわかる。行政や女性センターの働きかけについては、後でもふれる。

4-3 経済性と社会性の志向

女性のエンパワーメントの重要な要素である経済性の向上についてはどうであろうか。これまでに、Aさんは、ハーブの知識を得るために県主催の講座を受講することに始まり、商品化に向けた助成を県から受けたり、パッケージや事業展開にかかわる助言を、もりおか女性センターやさんりく未来推進センターから受けてきた。そしてこれらの資源をもとに、ハーブティーを市場で売る競争力を養い、経済性の向上をめざして取り組んできた。5アールから始めたハーブ栽培を、震災後に50アールに広げ、盛岡市のホテルのシェフ等、様々な人とのつながりから、販路が広がってきている。現在のところは売上で生活していくまでには達していないが、県の制度を活用して新たなパッケージの開発や販路の開拓等を積極的に進め、徐々に上昇しているところである。周りでは、農地を手放す家が多いなか、Aさんは、3人の子どものうちいずれかに農地を受け継いでもらいたいと、漠然とではあるが考えている。そのためにも、今は中長期的な視点を持って経済性の向上を図り、ハーブの栽培・加工・販売で生活できるような基礎をつくっていきたいと思っている。

この一方、ハーブを活用した場づくりにも力を注ぎ、前節で見たように、様々なネットワークを活かして活動を広げている。これらは、起業活動のコミュニティへの社会的効果（アウトカム）として捉えられるといえるだろう。このような必ずしも経済性の向上に結びつかない社会的な活動については、既に農村女性起業の研究において「経済的な価値の範疇外」（藤井 2011）やビジネスを志向する価値観と対比させた「志」（宮城 2014）といった社会性を志向する活動として論じられている。また柏尾（2014）は、滋賀県内の農村女性たちが、直売所で農産物を売ることによって得たお金で栽培面積を増加させた結果として、販売額を上げずに近隣や知人への贈与行為を補強しているという興味深い聞き取りを行っている。講座の開催やネットワーク形成の支援、補助金の交付等、学びや活動の後押しをする公共機関等は、個々の女性の状況に即した経済的自立を重視しつつ、この社会性を志向するバランスにも着目して丁寧に支援し、連携していくことが、持続可能な地域をつくることにつながっていく可能性が大きいといえるだろう。

4-4 関係性、および行政や男女共同参画センター等による教育的アプローチ

Aさんのエンパワーメントのプロセスには、環境要因として人とのつながりが大きく影響している。活動を前進させた主なつながりとして、公的機関の職員（農業改良普及センター、県（農政部、商工労働観光部等）、さんりく未来推進センター、もりおか女性センター等）、ハーブティーをそれぞれの活動に活かしたり協働しようとする地域の人たち（タクシー会社社長のBさん、盛岡市内ホテルのシェフ、障がい者支援のNPO法人、シングルマザー支援にかかわる人、被災地支援にかかわる人等）、起業を通じた仲間（さんりく未来推進センターの起業仲間、もりおか女性センターの起業支援の関係者等）が挙げられる。公的機関とのつながりも、組織ではなく担当者とのつながりであり、補助金やコンテストの公募や研修の機会等の情報を直接届けてくれる関係性ができている。Aさんを支援する公的機関の担当者も、支援者―支援の受け手というだけの関係ではなく、Aさんとのつながることで、震災復興を含むよりよい地域をつくっていかうといった思いを持つ「互酬性」のネットワークでつながっている。農業分野では、先行研究でも、社会的に不利な立場に置かれてきた女性に対して、行政がエンパワーメントの後押しをする役割が示されている（坪井2013、藤井2011）が、特に現在は、6次産業化の推進や女性起業の支援、復興支援等、支援が充実してきていることが、Aさんの活動の追い風になっている。

これらは、社会関係資本の観点からは、いわゆる橋渡し型の「弱い紐帯」によるネットワークと言える。一方、事例では、結束型の「強い紐帯」のなかには、地域に根づく規範や性別役割分担意識によってマイナスの環境要因としてつながる紐帯があることが確認された。Aさんの場合、農地でハーブを栽培したいと家族に話したが初めは反対された。この時には、家族のなかでの関係性への違和感を素直に話して交渉した。起業した際の近隣との関係については、家族の応援や弱い紐帯の仲間を得ることにより、このようなディスエンパワーメントの紐帯を断ち切ることができ、前に進んできたといえよう。

Aさんの起業をプロセスとして見ることで、行政や女性センター等の公的機関の働きかけは、①ジェンダーの視点を持ったアプローチ、および②教育的なアプローチという2つの方向性において、きめ細かく、継続的であり、地域でのネットワークを有効に活用したものであることがわかる。ジェンダーの視点からは、例えば転機③において、女性センター職員が気持ちの落ち込むAさんを陰で支えたように、女性は起業した後もジェンダーにかかわる家族や地域との関係性から継続が困難になる問題が発生しやすいことを考慮し、起業講座の開催だけでなく、その後の起業者の生活や事業の継続に目を配っている。

また、Aさんが起業による個人の課題解決だけでなく、コミュニティアプローチによる福祉的な領域ともいえる場づくりを志向するまでを中長期的に後押しをしている。これらは、持続可能な社会づくりに向けて、ジェンダーや多様性を重視するコミュニティを形成するために、公的機関等が個人の学びをどのように支援していけばよいかを示唆するものとなっている。個人が主体性や関係性を築きつつ、同時に地域力を高めていくアプローチでは、「支援者の役割は、広い意味での教育者」（高橋2013：p.81）であることが重要となる。起業を通じた地域づくりは、社会性を志向する支援だ

けでなく、いかなる社会性を志向するかが問われており、ここに社会教育的なアプローチの意義があるといえるだろう。

5. おわりに まとめと今後の課題

本稿では、ハーブの栽培・加工・販売の起業をし、販路を広げるとともに、障害者や女性が集まることのできる場づくりを行う1人の女性を事例として、起業にかかわる学びを通して、女性がどのように主体性を獲得していくのか、その過程でどのように環境要因に影響を受けているのかについて検討した。また、起業を通じた個人のエンパワーメントと地域への効果を、連続性を持ったプロセスとして捉えることを試みた。

本稿で明らかにしたことは、以下3点にまとめることができよう。1つ目に、Aさんは、ジェンダーの規範等の環境に規定されながらも、主体性や関係性を築きながら、経済的なエンパワーメントを獲得していったことである。ライフコースにおける転機に沿って見ることで、学びのプロセスにおける環境要因の違いや変化等も明らかになった。Aさんにとって、起業を通じた学びとは、労働の場の学びにとどまらず、震災による大きなライフコースの変化を経て、生きるための学びのプロセスであったといえるのではないだろうか。2つ目に、このようにAさんが主体性や関係性を築くにあたり、農業普及センターや女性センター等の教育的なアプローチが、起業における社会性の志向を強くするだけでなく、いかなる社会性を志向するのかに大きく影響していることが示された。3つ目に、Aさんのエンパワーメントは1人で達成していくものではなく、行政や仲間等の関係性の中に捉える必要があること、またこのような社会関係資本が幾重にも重なる時に、Aさん自身がエンパワーメントしていくとともに、多様な人々が暮らしやすいコミュニティも広がることが示唆された。

今後の課題として、経済性と社会性の双方を志向する女性の起業について、この他の実践についても分析を行い、学びとエンパワーメントのプロセスについて、さらに精査することを挙げておきたい。

【参考文献】

- 秋津元輝・藤井和佐・澁谷美紀・大石和男・柏尾珠紀2007『農村ジェンダー——女性と地域への新しいまなざし』昭和堂。
青島祐子2009「キャリア理論の現在——キャリア概念の理解を中心に」矢澤澄子・岡村清子編『女性とライフキャリア』勁草書房。
デューイ、ジョン2004『経験と教育』講談社。
藤井和佐2011『農村女性の社会学——地域づくりの男女共同参画』昭和堂。
エルダー、グレン・H、ジャネット Z ジール編2013『ライフコース研究の技法——多様でダイナミックな人生を捉えるために』明石書店。
エルダー、グレン・H、ジャネット Z ジール編2003『ライフコース研究の方法——質的ならびに量的アプローチ』明石書店。

Giddens, Anthony, 1984, *The Constitution of Society*, Polity Press.

Golla, Anne Marie, Anju Malhotra, Priya Nanda, and Rekha Mehra, 2011, *Understanding and Measuring Women's Economic Empowerment: Definition, Framework and Indicators*, International Center for Research on Women (ICRW) .

朴木佳緒留 2010「成人女性の学習と男女共同参画」末本誠・松田武雄『新版 生涯学習と地域社会教育』春風社.

飯島絵理 2016「女性の学習と起業——男女共同参画センターにおける女性の起業支援の今日的意義」東北大学大学院教育学研究科・研究学部研究年報 第64集第2号.

岩上真珠 2013『ライフコースとジェンダーで読む家族〔第3版〕』有斐閣.

柏尾珠紀 2014「そこにある生産手段を生かす——ライフステージと生産活動」徳野貞雄・柏尾珠紀『T 型集落点検とライフヒストリーでみえる家族・集落・女性の底力——限界集落論を超えて』農山漁村文化協会.

倉田良樹 2011「構造化理論から知識の社会学へ(2)」『一橋社会科学3』 pp.1-24.

黒川雅之 2007「ナンシィ・シュロスバーク：人生上の転機(トランジション)とその対処」渡辺三枝子編『新版キャリアの心理学——キャリア支援への発達のアプローチ』ナカニシヤ出版, pp.125-144.

レイブ・ジーン, エティエンヌ・ウェンガー 1993『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書.

松永桂子 2010『農産物直売所／それは地域との「出会いの場」』新評論.

松尾睦 2006『経験からの学習——プロフェッショナルへの成長プロセス』同文館出版.

三菱総合研究所 2011『平成22年度「教育改革の推進のための総合的調査研究」～教育投資が社会関係資本に与える影響に関する調査研究～報告書』.

三菱総合研究所 2010『平成21年度教育改革の推進のための総合的調査研究～我が国の教育投資の費用対効果分析の手法に関する調査研究』.

三菱総合研究所 2009『平成20年度教育改革の推進のための総合的調査研究 教育投資の費用対効果に関する基本的な考え方及び文献の収集・整理 報告書』.

三菱総合研究所 2008『平成19年度教育改革の推進のための総合調査 教育振興に係る計画等に対する評価手法に関する状況調査 報告書』.

宮城道子 2014「農村女性起業における当事者性と持続可能性」『サステイナビリティ研究』 Vol.4, pp.111-124, 法政大学サステイナビリティ研究所.

村田晶子 2006『女性問題学習の研究』未来社.

中原淳 2013「経験学習の理論的系譜と研究動向」日本労働研究雑誌 No.639 October pp.4-14.

———2012「学習環境としての『職場』——経営研究と学習研究の交差する場所」日本労働研究雑誌 No.618 January pp.35-45.

———2010『職場学習論——仕事の学びを科学する』東京大学出版会.

日本村落研究会編 2012『農村社会を組みかえる女性たち——ジェンダー関係の変革に向けて』年報村落社会研究 第48集.

———1995『家族農業経営における女性の自立』年報村落社会研究 第31集.

野村総合研究所 2009『教育改革の推進のための総合的調査研究～教育投資の費用対効果についての先導的分析～報告書』.

澤野久美 2012『社会的起業をめざす農村女性たち——地域の担い手としての農村女性起業』筑波書房.

関満博, 松永桂子編 2012『集落営農／農山村の未来を拓く』新評論.

———2010『「農」と「食」の女性起業——農山村の「小さな加工」』新評論。

Sida (Swedish International Development Cooperation Agency), 2015, “Supporting Women’s Economic Empowerment: Scope for Sida’s Engagement” Sida.

高橋満 2015「対人支援職者の力量形成」高橋満・槇石多希子編著『対人支援職者の専門性と学びの空間——看護・福祉・教育職の実践コミュニティ——』創風社 pp.11-24.

———2013『コミュニティワークの教育的実践——教育と福祉とを結ぶ』東信堂。

———2005「ジェンダー／労働・成人教育」高橋満・槇石多希子編『ジェンダーと社会教育』創風社。

田中俊也 2004「状況に埋め込まれた学習」赤尾勝己編『生涯学習理論を学ぶ人のために』世界思想社 pp.171-193.

The International Bank for Reconstruction and Development/The World Bank, 2011, “world development report 2012 GENDER EQUALITY AND DEVELOPMENT”, The World Bank, Washington DC.

徳野貞雄・柏尾珠紀 2014『T 型集落点検とライフヒストリーでみえる家族・集落・女性の底力—限界集落論を超えて』農山漁村文化協会。

坪井ひろみ 2013「秋田県農村女性起業活動におけるソーシャルビジネスの発展可能性」『秋田大学教養基礎教育研究年報』 pp.65-74.

山川肖美 2004「経験学習——D.A. コルブの理論をめぐって」赤尾勝己編『生涯学習理論を学ぶ人のために』世界思想社 pp.141-169.

山澤和子 2015『女性の学びと意識変容』学文社。

Wu, Diana, 2013, “Measuring Change in Women Entrepreneur’s Economic Empowerment: A Literature Review”, Working Paper, September 2013, The Donor Committee for Enterprise Development.

【注】

- 1 また Wu (2013) は、女性の経済的エンパワーメントの領域の1つとしてのエージェンシーを「関心のあることを実行し、そのための資本やサービス、支援にアクセスする能力、知識、意識、スキル、自信」と説明している。
- 2 Aさんは、もりおか女性センターに、経済性と社会性の双方を志向する視点を持ち活動を始めている起業講座修了生として紹介してもらった。インタビューは、第1回目を2016年8月、第2回目を2017年3月に、Aさんの自宅の敷地内にある作業場にて行った。もりおか女性センターの調査は、起業支援事業についての聞き取り調査を2015年10月に、「女性起業芽でる塾実践編」(盛岡市)の聴講を2016年7月に行った。なお、第1回目のインタビューおよびもりおか女性センターの調査は、独立行政法人国立女性教育会館が実施する調査研究の一環として行った。
- 3 参考資料：岩手県農業改良普及会「かがやく女性たち——ハープで豊かな生活を楽しむ」『農業普及』2004年10月号 VOL666, 家の光協会「潮風の中で育てる癒しのハープ」『家の光』東日本版2016年2月
- 4 もりおか女性センターは、女性たちの設置要望の活動を経て2000年に盛岡市内に開館。2006年からは、設置要望の活動を行っていた女性たちによって結成された特定非営利法人参画プランニング・いわてが指定管理者となっている。
- 5 三陸沿岸の被災地を中心とした起業支援を目的として、2013年5月に設立された。

Women's Entrepreneurship and Economic Empowerment

Eri IJIMA

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

This paper discusses the process of women's economic empowerment, while the experiences of women's entrepreneurship are supposed as a part of adult learning. It examines a case of a woman who has started a new small business; how she has used resources, and has built up her agency, power, and relationship, having been affected by social backgrounds and environmental factors such as gender roles, norms, and structures. It also considers how her activities are having an influence on the community.

As a result, this paper shows the following three points. (1) The woman achieved economic empowerment through her experiences of entrepreneurship. (2) Educational approaches by official facilities such as women's center have affected on not only enhancing her community oriented views, but also what sort of community she has created. (3) Women's empowerment has been achieved in the relationships of the community.

Keywords : Women entrepreneurs, Empowerment, Women's adult learning, Experiential learning, Educational approach

